報　　告

エジプト　ダハシュール北遺跡における早大隊の考古学調査
—1997年～2002年の発掘調査から—

吉村　作治*　近藤　二郎**　長谷川　奏***　中川　武****　西本　真一****

Remarks on the archaeological researches at Dahshur North, Egypt
−Excavations by Waseda University (1997-2002)−

Sakuji Yoshimura* Jiro Kondo** So Hasegawa***
Takeshi Nakagawa**** Shin-ichi Nishimoto****

Abstract

Since the mid 1990's, Institute of Egyptology, Waseda University, has excavated the New Kingdom necropolis newly discovered at the site of Dahshur North, located within the pyramid zone of Egypt. In the study of Memphite necropolis formation during the New Kingdom period only the Saqqara area has been discussed, and therefore, our discovery in Dahshur North encourages further discussion in the field of Egyptology. Free-standing tombs with superstructures and shafts contained objects dated to the Post-Amarna period, which suggests that Memphis had recovered its political importance after the end of the Amarna period, and also that the formation and use of the necropolis at Dahshur are the same as in the south area at Saqqara. Therefore, the results of our research have proved that the area extending more than 5 km south from Saqqara to Dahshur must be reconsidered. Moreover, the whole desert area between both necropolises will be related to the Memphite city boundary, which may assist the study of New Kingdom city planning, as exemplified by Thebes and Amarna.

*人間環境科学科
**早稲田大学文学部
***早稲田大学エジプト学研究所
****早稲田大学理工学部

*Department of Human Behavior and Environment Sciences
**School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University
***Institute of Egyptology, Waseda University
****School of Science and Engineering, Waseda University

はじめに

早稲田大学エジプト調査隊[1]は、90年代の半ばにメンフィス地域の砂漠域において、人口衛星の画像を用いた遺跡の分布調査を行った(図１)。その結果、ピラミッド地域として著名なダハシュールで新王国時代の墓地が発見された。ダハシュールは長く軍事基地として一般の立ち入りが禁じられていたため、本例が初めての本格的な科学的調査となった。

予備調査の結果、ダハシュール北遺跡の丘陵部には、200～300基のシャフトが分布していることが推測された。発掘調査は1997年３月に丘陵部の南端から始まり、2002年４月までの５年間に、総計８回の発掘調査が行われ、6800㎡が調査対象となった。その結果、調査区には、上部構造を有していたと推測される２基の神殿型平地墓と、この周囲に26基のシャフトが分布していることが判明した[2]（図２)。

そこで本稿では、まず当該地域における先行研究の概要を述べ、次に５年間のダハシュール北遺跡発掘調査でみつかった遺構と遺物の全容を振り返り、年代的な位置付けを明確にしたい。そして、ダハシュール北遺跡の墳墓の所有者と墓地の造営背景を推測することによって、早稲田大学の調査が、1990年代半ばまでのメンフィス地域の新王国時代墓地研究史に新たにどのような知見を与えたか、その成果を明らかにしてみたい。

１．メンフィス地域における新王国時代墓地の先行研究

メンフィス地域は、ピラミッドで著名であるが、当時の都市遺構は厚い沃土に埋もれているために、その痕跡は明瞭ではない。新王国時代以降に形成された都市に関しては、19世紀末のペトリーの発掘を端緒に、その後に続けられた考古学調査の成果と、ギリシャ・ローマ時代の記述をすりあわせて復元が進んだところにこの都市の特徴がある[3]。その結果、現在は３㎞ほど東にあるナイルが、往時はメンフィスに接して流れていたこと、メンフィスの都市内部はプタハ神殿に関わる神殿群を中心として、王宮、役所、軍事施設、職人の仕事場、一般居住区などが複雑な構成をしていることが推測されるようになったが、メンフィスの中核部分を占めた神殿配置は不明な部分が多いため、テーベやアマルナなどの新王国時代を代表する都市よりその構造研究が遅れてきた経緯がある[4]。

このメンフィスの地の西側にある砂漠地帯では、既に19世紀半ばにレプシウスによって遺跡分布調査が行われた歴史をもつが、現在ではそれらの中には位置さえも不明になっている墓（Lost Tomb）がある。1970年代の半ばからは、イギリス・オランダ合同調査隊が、サッカラのウナス参道南側（図１：Ａ地区）において調査を開始し、学史から消えていた墳墓など多数の重要な神殿型平地墓を発見した[5]。ここは古王国時代の墓地が再利用された地であり、第18王朝末のツタンカーメン王の宝物庫長を務めたマヤ[6]や、ツタンカーメン王の時代の軍人でやがて王となるホルエムヘブ[7]、さらにはラメセス２世時代のティア[8]などの高級官僚の墓地がみつかったために、新王国時代にはテーベのみならず、メンフィス地域においても、重要な墓地造営活動が営まれていたことが判明した。やがて1980年代後半に、同地でエジプト調査隊が発掘した地点からは、第19王朝時代の広大な墓地がみつかったために、ウナス王参道の南側一帯が、ラメセス諸王の時代にまで利用されていたことは確実となった[9]。

またサッカラでは、ジェセル王の階段ピラミッドの北東にあたる崖（図１：Ｂ地区）が新王国時代のもう一つの重要な墓地である。1980年代から同地で調査を行ったフランス調査隊は、新王国時代の岩窟墓を発見し、第18王朝でも最も早期に開発された墓地である可能性が得られた[10]。さらに北側の崖際には、ラメセス朝時代の軍事官僚の岩窟墓が発見されため、崖がまわりこむ一帯は第19王朝初期まで利用されたと考えられた。Ｂ地区には、さらにテティ王のピラミッドの東側に広がる新王国時代墳墓がある。ここは20世紀の前半以来、欧米の調査隊やエジプト政府が調査を行ってきた場所であり、いくつかの神殿型平地墓もみられたが、中心は多数の単純埋葬墓であり、比較的身分の低い人々の墓地と推測された[11]。

ダハシュールに関しては、これまで、第４王朝スネフェル王の屈折ピラミッドの河岸神殿周辺などで、新王国時代の活動の痕跡が散見されることなどの点は報告されていたが[12]、早大隊の調査は、

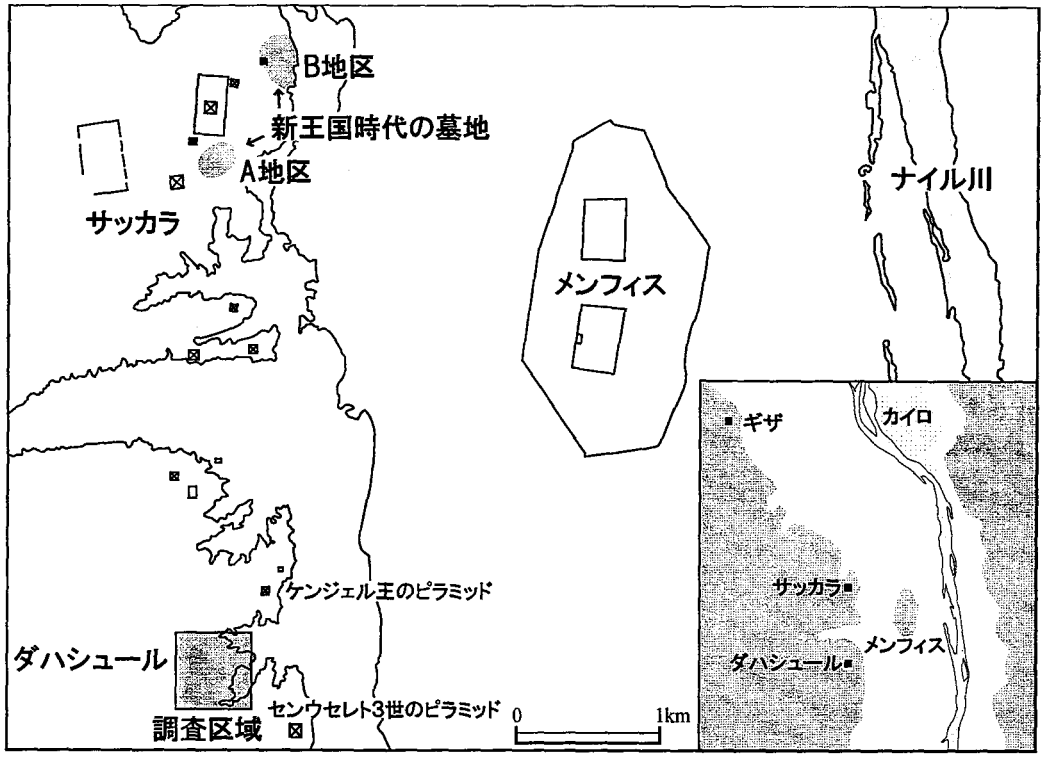

B地区
新王国時代の墓地
A地区
サッカラ
メンフィス
ナイル川
ギザ
カイロ
サッカラ
メンフィス
ダハシュール
ケンジェル王のピラミッド
ダハシュール
センウセレト3世のピラミッド
調査区域
0
1km

図 1

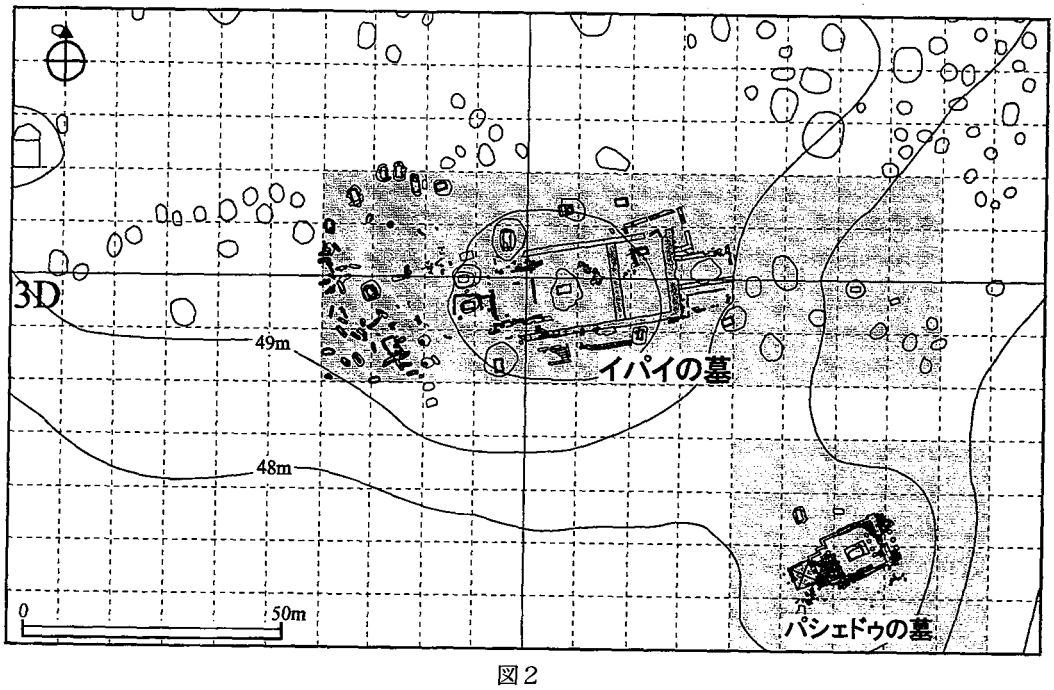

3D
49m
イパイの墓
48m
0
50m
パシェドゥの墓

図 2

神殿型平地墓を含む広大な墓地の存在を明らかにした初めての例となった。サッカラでは、神殿型平地墓の全てがツタンカーメン王の治世以後に位置づけられるために、ダハシュール北遺跡の出土遺構は、特にウナス王参道の南側に広く分布する神殿型平地墓群との深い関連性が考えられ、同タイプの墳墓が現れ始める時代から歴史的背景を検討することが重要な研究課題となった[13]。

2．ダハシュール北遺跡の出土遺構と出土遺物

1）出土遺構

①イパイの墓（図2、3）：イパイの墓は、長軸約47 mを測り、最前面には、第1中庭に至るための斜路、もしくは緩やかな階段であったと思われるアプローチが取りつけられている。第1中庭は、第2中庭とともに盛土によって人工的に床高が上げられており、第1中庭では小さなシャフトが見つかった。第2中庭の北東隅には石灰岩の敷石が一部残存していたが、列柱が立っていたことを示す痕跡はみつからなかった。この第2中庭の中央から、地下に通じるシャフト（シャフトA）が発見された。第2中庭の西側には、中庭の床高より低い位置に礼拝室と双方の側室の壁体が残存するが、これらは基礎部分であり、建造当初の予定ではさらに高く壁体を立ち上げ、その上に床を形成しようとしたものと考えられた[14]。

第2中庭に設けられたシャフトでは、強固な岩盤に到達するまでの間、シャフトの内壁には石灰岩板が積まれており、南北の壁にはシャフトの幅を広げるために広い面積にわたって掘り窪めようとした荒い鑿跡が認められた。地下の部屋に残された掘削痕からは、A室からぐるりとまわりこんでE室に至る諸室が当初計画された部屋であり、F室とG室は後に付け加えられたと判断された。後述するように、イパイの墓から取り上げられた遺物からは、同墳墓が18王朝末から第19王朝初にかけて利用されたものであると考えられていたため、F室とG室はこの年代の中でも後期の部分に関わるものと推測された。

イパイの地下の一番奥まった所にある第2層の部屋（H室）からは、花崗岩製の棺が発見された（写真1）。棺は既に盗掘を受けていたが、棺の内部からみつかったシャブティに刻まれた碑銘や棺に描かれた彩画などから、「王の執事、書記 *imy-r pr sš-nsw*」の肩書きを有するメスという人物に所属することが判明した（写真2、3）。棺の顔面周辺は丁寧に掘りこまれていたものの、他の部分には当初の予定を変更した痕跡がみつかり、急場でここに運び込まれたものと考えられた。

②イパイの墓の前身建物：イパイの墓では、第2中庭の直下から前身建物がみつかった。建物はイパイの墓の3分の1程度であり、軸線はイパイの墓と若干異なっていた。建物には礼拝室や奥室があるが、最前面に導入路は有していないようであった。中庭ではシャフトの石組みが発見されたが、シャフト自体は未完成であった。イパイの墓が、この前身建物の存在を知りつつ、その上にかぶさるように建造されたことは、壁体基礎の築造状況から明らかであった。

③パシェドゥの墓（図2、4）：パシェドゥの墓は、長軸が約21 mを測り、イパイの墓の半分ほどの規模であった。墓には、中庭の奥に礼拝室が設けられていたが、イパイの墓のような前面のアプローチが作られず、かわりに幕壁を有するポルティコを配し[15]、礼拝室の後ろ側には小ピラミッドが作られていたことが判明した。小ピラミッドは完全に破壊されていたが、破片で取り上げられた珪岩製のピラミディオンからは、小ピラミッドが1辺4.5 m程の規模であったことが窺われ、ピラミディオンに刻まれた碑文からは、この墓がパシェドゥという人物によって建てられたことが判明した[16]（写真4）。

パシェドゥの墓の中庭にはシャフトが作られており、深度はおよそ10 mを測った。地下には、西側に4室（A室～D室）、東側に1室が作られていた。このシャフトは、大規模な盗掘を受けていたために、埋葬に関する遺物は殆ど取り上げられなかったが、D室の最奥部から床面に作られた箱型の石棺がみつかり、同様の出土例から考えて、この棺の埋葬が第19王朝初期に位置付けられると推測された[17]（写真5）。

④その他のシャフト：予備調査では、調査対象の丘陵に分布する多数のシャフトのうち、15基に関して既に撹乱されていることを確認し（シャフト1～15）、発掘調査で新たにみつかったシャフトには16より番号をつけ、5年間の調査でシャフト

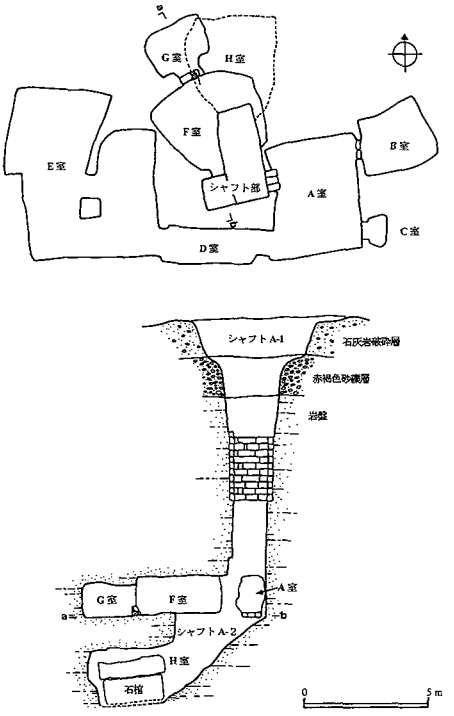


図3

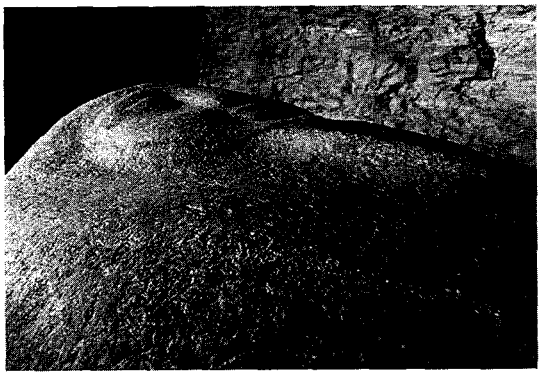
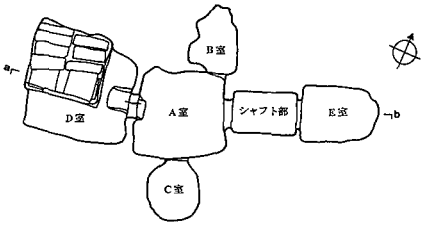


写真1

写真2

写真3



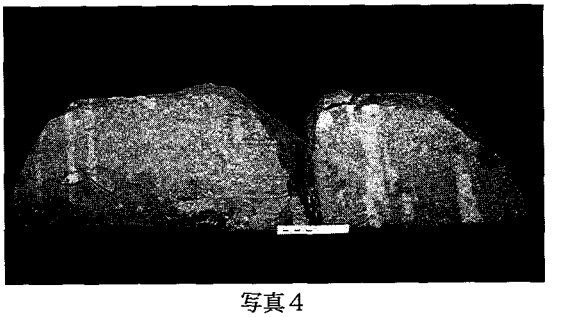


写真4

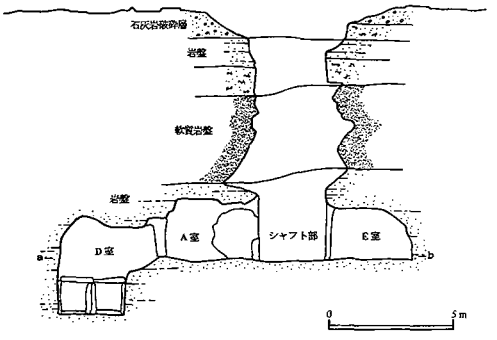


図4

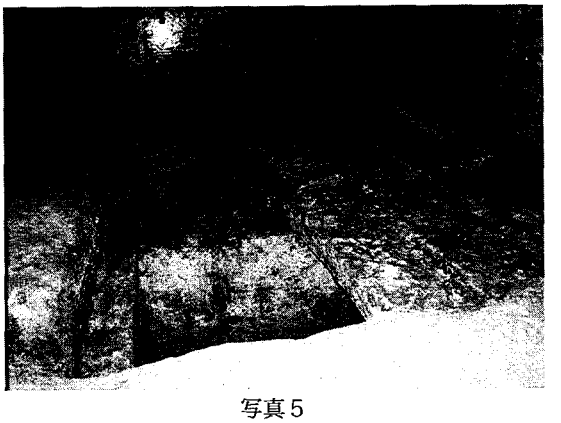


写真5

39までを数えた。したがって本稿では、シャフト16～39までの24基に加え、上記の撹乱墓のうち、調査を行ったシャフト13、14の２基を加えた、総計26基を対象としている。これらの殆どにおいては、明確な上部構造が確認されず、軸線の方向も南北方向と東西方向を指向するものがさまざまにみられた。また16基はシャフトの掘削が未完成であった。

⑤単純埋葬墓：単純埋葬の痕跡は調査区の全体でみられたが、特にイパイの墓の西側地区で40基ほどの単純埋葬墓が集中して分布していた。これらの墓は、地山の礫を穿ったもので、軸線は一定ではなく、男性と女性、成人と子供などさまざまな遺体が含まれていた。遺体は一般的に葦あるいは椰子で包まれるが、日乾煉瓦が用いられたり、木棺に埋葬されるものもあった。多くの例が副葬品を持たない質素な埋葬であるが、青銅の指輪がはめられていたり、象牙製の耳輪や木製のパレットなどの副葬品を有するものなどもみられた。

２）出土遺物

①土器と容器類：シルト陶土とマール陶土の土器が各墓から出土し、さまざまな器種の存在が確認され(写真６)[18]、新王国時代を特徴づける青色顔料や赤色顔料を施したものもみられた。またイパイの墓からは、ミケーネ地域の赤色彩文壺が出土した[19]。壺型土器の封泥は多数出土したが、シャフト17出土の封泥には、ツタンカーメン王の銘が押されていた[20]（図５-３）。土器以外には、ファイアンス製やアラバスター製のカノプス壺が多数みつかった(写真７)。イパイの墓から出土したカノプス壺の胴部片には、「厩の監督官メス *imy-r ssmt*」の碑文を持つものがあった。またシャフト14から出土したアラバスター製の小壺は、丸い胴と外側にせり出した口をもち、表面が精巧に磨かれていた[21]（写真８）。

②装身具：指輪は、イパイの墓から、飾り面にロータスをあしらったもの[22](写真９）やツタンカーメン王（*nb-ḫprw-rᶜ*）と王妃アンケセナーメン（*ᶜnḫ-s-n-imn*）の名をもつファイアンス製指輪などがみつかった（図５-４，５）。シャフト27からは、ウジャトをあしらった瑪瑙の飾り面と金製のリングをもつ指輪が出土し[23]（写真10)、イパイの墓からはラメセス２世（*wsir-mᵓᶜt-rᶜ-stp-n-rᶜ*）の名を持つファイアンス製スカラベが出土した（図５-６）。襟飾りは、ひな菊の花と椰子などの果実を象ったファイアンス製ビーズがつなぎ合わされ、両端にファイアンス製の飾り留めをもつ５連の襟飾りに復元された襟飾り[24]が、シャフト17から出土した(写真11)。

③道具、家具：シャフト13から出土したアラバスター製の化粧用皿は、鏡の形を模したもので、表面が精巧に磨かれていた[25]（写真12)。シャフト27から出土したセネトと呼ばれる象牙製のゲーム盤には遊戯面と引き出しがあり、円錐形と鼓形の二種類のコマと動物の踵角から作られたサイコロもみつかった[26]（写真13)。木製枕もシャフト27より出土したもので、正面にはアメンエムオペトの銘文があり、支柱にはベス神とトゥエリス神が線刻で描かれていた[27]（写真14)。シャフト13から出土したアラバスター製の化粧用皿は、鏡の形を模したもので、表面が精巧に磨かれていた[28]。これら道具や家具の扉部分を封じた封泥がイパイの墓やシャフト27から出土し、後ろ手に縛られた「九人の捕虜」の図柄がみられた[29]。

④シャブティ、彫像：イパイの墓のシャフトと地下第１層の地下室からは、メス、フイ、アメンカウ、パシェドゥ、アメンエムオペトなどの名をもつ多数のシャブティが出土した[30]（写真15, 16)。前述したイパイの墓の石棺から出土した砂岩製シャブティは、ヌビア頭巾を被った姿をしており、キルト周りに石棺の所有者メスの名と称号がみられた[31]。また石棺の内部と周囲には、メスの名をもつ着衣型のものや、表面にビチュメンが塗られた木製のものなど、多数のシャブティがあった[32]。シャフト23～25からは、ケンティケティヘテプ、ヘヌウトミラー、ピプイなどの名をもつ多数のシャブティが出土した。

⑤棺：イパイの墓では、地下第１層のＥ室周辺で、火を受けた多数の木棺片が出土した。シャフト21から出土した木棺は、ビチュメンが施された上に、黄色顔料によって装飾が施されていた[33]。シャフト23、24で出土した木棺には、棺の顔部分が残存している例がみられ、眼部分にはガラスの象眼が施されていた(写真17)。シャフト23から出土した土製棺は、棺の上半身部分がはめこみ式の蓋になっており、人面が表現されていた[34]。

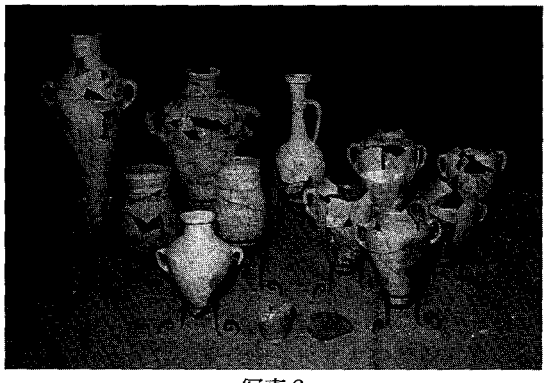


写真6

写真7

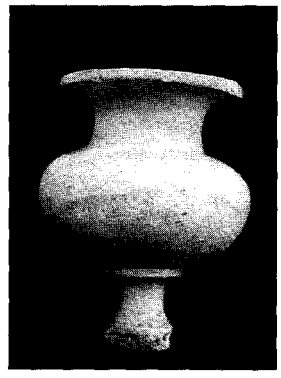


写真8

写真9

写真10

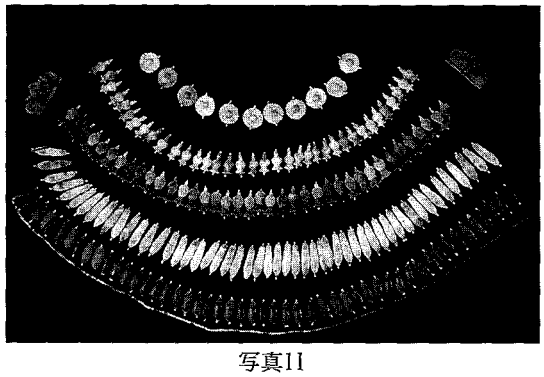


写真11

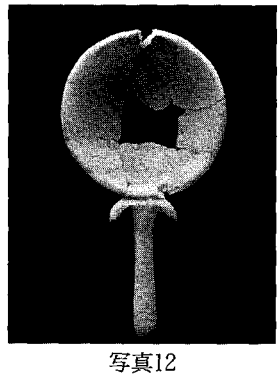


写真12

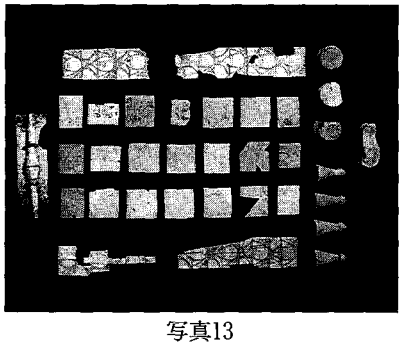


写真13

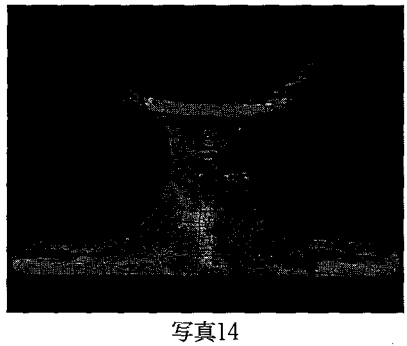


写真14

写真15

写真16

写真17

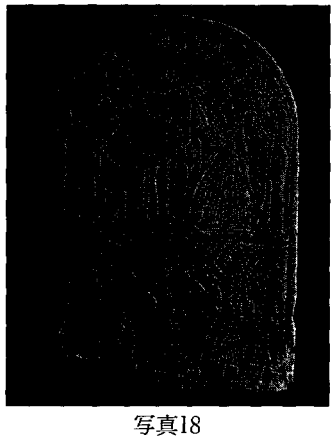


写真18

写真19

⑥ステラ：シャフト17から出土した矩形のステラには、中央上部にネイト大司祭のプタハエムウィアと彼の妻で王の乳母ナイトがオシリス神を礼拝する姿が、下段には夫妻に香と供物を捧げる彼らの息子のイイとフイの姿が描かれ、図像はアマルナ美術が登場する以前の特徴を有していた。シャフト39出土のステラは、上段にはパシェドゥと妻フイが、オシリスとイシスに奉献する場面があり、下段にはパシェドゥのミイラに清めの儀式を行う３人の息子が描かれている。パシェドゥに哀悼の意を表して立ち並ぶ２番目の人物は、「厩の監督官」の称号をもつメスと記されていた（写真18)。イパイの墓の南から出土したステラの上面には、「王の書記、執事、彼に愛されし者、イピ *Ỉpy, sš-nswt (mꜣʿ), mr.f, imy-r pr*」が、玉座に座するオシリス神とその背後のイシス神とネフティス神に供物を捧げる場面があり、下段には、イピと向き合う息子や娘など４人の家族が描かれていた[35]。

⑦レリーフと建材:イパイの墓のシャフト底部には多数のレリーフが投げ込まれており、その中には、礼拝姿勢をとる高官や神官が建物の前に立ち並ぶモチーフ（写真19）や、パピルスをもつ人物と動物が描かれたものがあった。また黄金のネックレスを拝受する貴人のモチーフなどもみられることから、これらは総合して、王が臣下に褒美を授与する「出現の窓」を構成していたものと思われ[36]、ホルエムヘブ王のカルトゥーシュをもつものもみられた。

3．資料の位置付けと成果の総合

調査地区に関わる総体の編年上の大枠を示唆するのは、イパイの墓から取り上げられた遺物である。イパイの名は、「オシリス、王の書記イパイ、声正しき者 *wsir sš-nswt mꜣʿ-ḫrw*」（図５－１）あるいは「(二国の主に) 愛されし、王の真の書記、王の執事、両手の清き者、イパイ、声正しき者 *sš-nswt mꜣʿ mr.f wbꜣ-nswt ʿwy Ỉpꜣy mꜣʿ-ḫrw*」（図５－２）という２種類のスタンプから確認されたが、イパイの埋葬はみつからなかったため、同人物像に迫る手がかりはなかった。イパイという名と、ステラでみられたイピとの関連も、現段階では不明である。シャフトに用いられた切り石の規格から、建造の時期は、アマルナ建造物の石材が積極的に用いられた時代を推測させた[37]。レリーフにはホルエムヘブの墓と類似した場面がみられる点や、ホルエムヘブ王のカルトゥーシュがみられたことは、このことを示唆していると思われる。

出土遺物は、前章の出土例の検討で記したように、土器からレリーフに至るまでの殆ど全ての遺物において、ポスト・アマルナ時代の強い影響がみられたが、特に指輪やスカラベなどの装身具や土器の封泥などに押されたツタンカーメン王とラメセス２世の名は、イパイの墓が利用された年代が、第18王朝末から第19王朝初期にわたることを具体的に示すものとなった。さらに石棺の周辺か

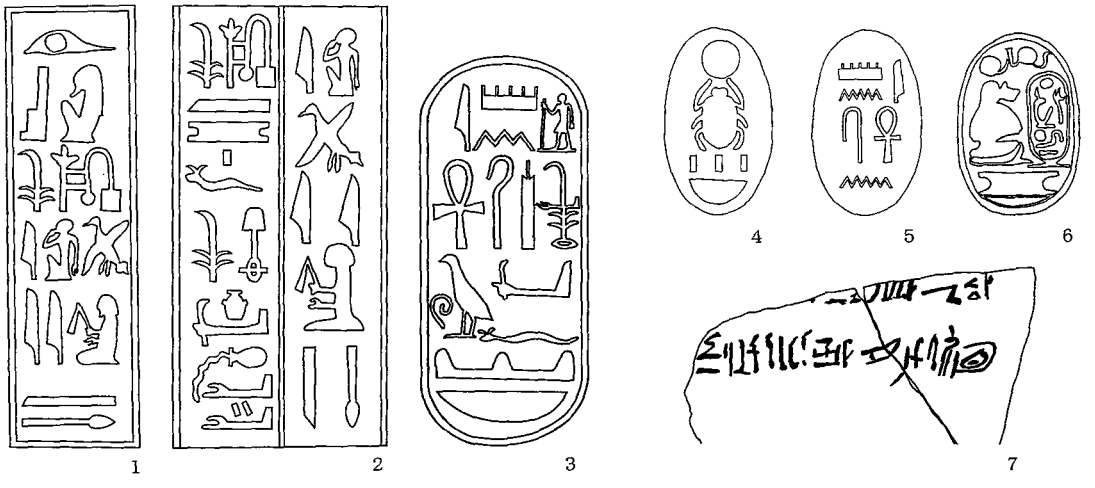


図５

ら出土した土器には「治世７年、ワイン、...ラメセス・メリアメン *rnpt-sp* 7 *irp*... *rᶜ-ms-sw-mry-imn*」（図５-７）と記され、石棺の埋葬を行ったメスがラメセス２世の治世の高官であると推測されたために、ダハシュール北遺跡の墓地ではラメセス諸王の時代に至るまで、前時代の墓地を再利用するなども含めて、有力者の埋葬が行われていたことは確実となった。さらに、イパイの墓の南では、地下にラメセス２世頃に位置付けられる箱式石棺を有するパシェドゥの墓がみつかったため、丘陵の最南端のエリアは、第19王朝初期の活発な墓地造営活動の痕跡を残す場であると考えられた。

しかしながら、これらの埋葬を行ったメスやパシェドゥの人物像に関しては、いまだ不明な点が多い。メスの名前に関しては、カノプス壺やシャブティで確認されており、中には「厩の監督官」の称号をもつものがあり、またステラにはパシェドゥという人物の息子にメスの名が読み取られたため、二者の関連が注目されたが、このステラではパシェドゥの人物像自体が不明であるという問題と関わることもあって、全体像は明らかではない。またピラミディオンを戴く墓を有したパシェドゥに関しても、イパイの墓とその周辺のシャフトから出土したシャブティ、ステラ、レリーフなどからは、「王の執事 *imy-r pr*」「門の監督官 *imy-r rwyt*」「下エジプト王の印綬持ち *sḏꜣty bity*」「王の右の扇持ち *ṯꜣy-ḫr ḥr wnmy n nswt*」など、パシェドゥという人物に関連する称号がいくつか得られているため、これらはパシェドゥの人物像に関わる資料となる可能性がある。

ダハシュール北遺跡における墓地造営活動の具体的年代に関しては、まず形成期の墳墓として、第18王朝末に特徴的な石製容器、胸飾りなどの装身具、化粧皿・枕・ゲーム盤などの道具類などを有していたシャフト13、14、17、27などが候補としてあげられ、これらは概ねイパイの墓の東側と北西側に位置する。一方、第19王朝に特徴的なシャブティに特徴付けられるシャフト23、24、25などが後期に関わる群として推測され、これらのシャフトはイパイの墓の礼拝室西側に位置する。形成期に関しては、若干ではあるが、中王国時代のビーズやトトメス３世やアメンヘテプ３世の名を持つスカラベなども出土しているために[38]、ツタンカーメン王の治世に先立つ時代から、墓地が形成されていたことを視野に入れておく必要がある。また後期の群に関しては、イパイの墓のＥ室周辺や、イパイの墓の西側に点在するシャフトの利用年代に対して、シャブティ資料が示唆する第19王朝時代から、土製棺が示す第３中間期以後の時代を考えていく必要がある。

単純埋葬は、一般的に年代資料を持たないために、編年の細部を位置付けることはできないが、これまでの出土状況を総合的に観察すると、新王国時代から、シャフトを持つ墓の埋葬と並行して、質素な埋葬があったことが推測される。単純埋葬が集中的に分布する背景に関しては、イパイの墓という大型墳墓の礼拝室の西側の、丘陵の標高が低くなった斜面で多数の単純埋葬がみつかった点は大いに興味深く、階層による墓地の分布のあり方がサッカラの事例[39]などと併せてより明確になる可能性がある。

おわりに

ダハシュールは、ピラミッド・ゾーンとしてその名を馳せてきたために、早稲田大学調査隊による新王国時代の墓地の発見は、エジプト考古学の領域の中でも、特に新王国時代のメンフィスの墓地研究分野にたいへん強い関心を呼んだ。私たちは、これまでサッカラの墓地に限られていた視点を、さらに5 km南のダハシュールの地にまで視野を広げて、アマルナ時代以後に形成された墓地の問題を再考するべき点を提唱したのである。2001年にカイロで行われた国際エジプト学者会議においては、ダハシュール北遺跡の調査を踏まえた近年の研究成果の総合が試みられ、活発な討議が行われることになった[40]。

当該の時代に、メンフィスが重要な行政拠点に復帰していったことは、出土遺構と出土遺物から明らかであり、この歴史的背景を探求していくためには、サッカラやメンフィス以外の地域における当該の比較事例とも総合して考えていく必要がある。メンフィス地域は、ピラミッドという象徴的な建造物を有する一方で、ナイルの河道変遷と氾濫沃土の堆積が都市に大きな影響を与えた地でもあるために、都市と墓地との関わりが分り難いという一面も有している。したがって、ピラミッ

ド時代のメンフィスは現在もその位置が確定されず、新王国時代の都市構造に関しても、テーベやアマルナなどと比較して遅れをとっているように見受けられる。しかし古代エジプトの墓地の領域は、都市の神域と深い関わりがあることが想定されるために、今後、同地に比較的豊富に残る新王国時代以後の資料なども利用しつつ、都市と墓地を包括したメンフィス地域の研究を開始していければと思っている。

謝辞

本稿を記すにあたって、馬場匡浩氏（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）、鈴口晶子氏（早稲田大学大学院文学研究科修士課程）をはじめとする早稲田大学エジプト学研究所と、早稲田大学理工学部建築史研究室のメンバーには、出土資料のデータ整理と図版作成に際して、たいへんな労をおかけした。末尾ながら記して、謝意を表したい。

参考文献

＜和文報告：1～8（報告書、概報）、英文報告：9～18（全般、概報）、建築考察：19～29＞

1．早稲田大学エジプト学研究所　編『ダハシュール北　〔I〕— 宇宙考古学からの出発 —』Akht Press、2003年。

2．吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、坂田俊文、惠多谷雅弘、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区予備調査報告」『人間科学研究』第10巻、第1号、早稲田大学人間科学部、1997年、115-122頁。

3．吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一、柏木裕之「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告－1997年第1・2次調査」『人間科学研究』第11巻、第1号、早稲田大学人間科学部、1998年、109-120頁。

4．吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告— 1998年第3次調査」『人間科学研究』第12巻、第1号、早稲田大学人間科学部、1999年、137-149頁。

5．吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 — 1998年第4次・1999年第5次調査 —」、『人間科学研究』第13巻、第1号、早稲田大学人間科学部、2000年、101-111頁。

6．吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 — 2000年第6次調査 — 」、『人間科学研究』第14巻、第1号、早稲田大学人間科学部、2001年、49-60頁。

7．吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 — 2001年第7次調査 — 」、『人間科学研究』第15巻、第1号、早稲田大学人間科学部、2002年、91-106頁。

8．吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 — 2002年第8次調査 — 」、『人間科学研究』第16巻、第1号、早稲田大学人間科学部、2003年、165-177頁。

9．Yoshimura, S., J. Kondo and S. Hasegawa, "A Japanese Expedition Discovers: The New Kingdom Necropolis at Dahshur", *KMT: A Modern Journal of Ancient Egypt* 10-3, 1999, Sebastopol, pp.36-43.

10. Yoshimura, S. and S. Hasegawa, "A Ramesside sarcophagus at Dahshur", *Egyptian Archaeology* 15, 1999, London, pp. 5-7.

11. Yoshimura, S. and S. Hasegawa, "New Kingdom necropolis at Dahshur —The tomb of Ipay and its vicinity", in Bárta M. and J. Krejči (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, Praha, 2000, pp.145-160.

12. Hasegawa, S., "The New Kingdom Necropolis at Dahshur", in Hawass, Z. (ed.), *Egyptology at the Dawn of the Twenty-first Century* vol. 1, Cairo, 2003, pp.229-233.

13. Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Sakata, M. Etaya, T. Nakagawa and S. Nishimoto, "A Preliminary Report of the General Survey at Dahshur North, Egypt" *Mediterraneus: Annual Report of the*

Collegium Mediterranistarum vol. XX, 1997, Tokyo, pp.3-24.

14. Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Nakagawa, S. Nishimoto, H. Kashiwagi, T. Sakata and M. Etaya, "Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt －1st Field Season, March-April 1997－; －2nd Field Season, July-September 1997－" *Mediterraneus: Annual Report of the Collegium Mediterranistarum* vol. XXI, 1998, Tokyo, pp.3-32.
15. Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Nakagawa, S. Nishimoto, T. Sakata and M. Etaya, "Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt －3rd Field Season, March 1998－", *Mediterraneus: Annual Report of the Collegium Mediterranistarum* XXII, 1999, Tokyo, pp.3-18.
16. Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Nakagawa and S. Nishimoto, "Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt, －4th-6th Field Seasons, 1998-2000－", *The Journal of Egyptian Studies* 8, 2000, Tokyo, pp.5-22.
17. Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Nakagawa and S. Nishimoto, "Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt, －7th Field Season, 2001－", *The Journal of Egyptian Studies* 9, 2001, Tokyo, pp.5-20.
18. Yoshimura, S. and S.Hasegawa, "Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt －7th Field Season, 2001－", *Annales du Service des Antiquités de L'Égypte* 78, 2003. (in print)
19. 西本真一、吉村作治、中川武、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　1」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、1996年、391-392頁。
20. 西本真一、吉村作治、中川武、近藤二郎、長谷川奏、柏木裕之、遠藤孝治「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　2」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、1997年、159-160頁。
21. 西本真一、遠藤孝治、柏木裕之、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　3」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、1998年、227-228頁。
22. 遠藤孝治、西本真一、柏木裕之、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　4　－出土したピラミディオンに関する考察－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、1998年、229-230頁。
23. 西本真一、遠藤孝治、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　5　－イパイの神殿型墳墓における地下構造－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、1999年、215-216頁。
24. 遠藤孝治、西本真一、佐藤雅彦、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　6　－シャフト墓の掘削方法について－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、1999年、217-218頁。
25. 遠藤孝治、西本真一、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　7　－イパイの墓の建造過程－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、2000年、255-256頁。
26. 西本真一、川鍋昌彦、遠藤孝治、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　8－イパイの墓にみられる日乾煉瓦造構法－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、2001年、115-116頁。
27. 小岩正樹、西本真一、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川　武「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　9－パシェドゥの神殿型石造貴族墓－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、2002年、633-634頁。
28. 西本真一、小岩正樹、吉村作治、近藤二郎、

長谷川奏、中川　武「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　10 —パシェドゥの墓のピラミディオン—」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、2002年、635-636頁。

29. 西本真一、吉村作治、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された王の書記メスの石棺について」『地中海学研究』XXIII、地中海学会、2000年、3-16頁。

註

1　早稲田大学エジプト学研究所（所長：吉村作治人間科学部教授）を中核とする組織で、ジェネラル・サーベイでは東海大学情報技術センターと、発掘が開始されてからは早稲田大学理工学部建築史研究室と共同調査を進めてきた。

2　文末に掲げた参考文献（調査概報、学会・シンポジウム報告など）を参照されたい。

3　ヘロドトス、ストラボン、ディオドロスなどの古代作家の記述と、ギリシャ語のパピルスを基本的な資料としている。考古学上の調査に関してはPetrie, W.M.F., *Memphis I*, London, 1909; Anthes, R., *Mit Rahineh 1956*, 1965, Philadelphiaなどを参照されたい。また総合研究に関しては以下を参照されたい。Kitchen, K.A., "Towards a Reconstruction of Ramesside Memphis", in Bleiberg, E. and R. Freed (eds.), *Fragments of a Shattered Visage: The Proceedings of the International Symposium on Ramesses the Great*, Memphis, 1991, pp.87-104; Malek, J., "The temples at Memphis. Problems highlighted by the EES survey", in Quirke, S. (ed.), *The Temple in the Ancient Egypt: New Discoveries and Recent Research,* London, 1997, pp.90-101; Jeffreys, D.G., *The Survey of Memphis, I. The Archaeological Report*, London, 1985; Jeffreys, D.G. and H.S. Smith, "Memphis and the Nile in the New Kingdom: A Preliminary attempt at a Historical Perspective", in Zivie, A.-P. (ed.), *Memphis et ses nécropoles au Nouvel Empire: Nouvelles données, Nouvelles questions*, Paris, 1988, pp.55-66.

4　Kemp, B.J., *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization,* London and New York, 1989, pp.197-217, 261-317.

5　Martin, G.T., *The Hidden Tombs of Memphis: New Discoveries from the Time of Tutankhamun and Ramesses the Great,* London, 1991.（以下*Hidden Tombs*と略記）

6　Maarten, J.R., *The Tomb of Maya and Meryt, II: Objects and Skeletal Remains,* London and Leiden, 2001.

7　Martin, G.T., *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-chief of Tut'ankhamun, I: The Reliefs, Inscriptions, and Commentary,* London, 1989; Schneider, H.D., *The Memphite Tomb of Horemheb: Commander-in-chief of Tut'ankhamun, II: A Catalogue of the Finds,* London, 1996.

8　Martin, G.T., *The Tomb of Tia and Tia: A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis,* London, 1997.（以下*Tia and Tia*と略記）

9　Tawfik, S., "Recently Excavated Ramesside Tombs at Saqqara 1: Architecture", *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 47, 1991, pp.403-409.（以下Ramesside Tombs at Saqqaraと略記）

10　Zivie, A.-P., "The 'Treasury' of 'Aper-El", *Egyptian Archaeology* 1, 1991, pp.26-28.

11　Quibell, J.E. and A.G.K. Hayter, *Excavations at Saqqara: Teti Pyramid, North Side,* Le Caire, 1927; Firth, C.M. and B. Gunn, *Excavations at Saqqara: Teti Pyramid Cemeteries,* 2 vols., Le Caire, 1926.

12　Fakhry, A., *The Monuments of Sneferu at Dahshur, II. The Valley Temple, Part 2. The Finds,* Cairo, 1961.

13　Zivie, A.-P., "The tomb of the lady Maia,

wet-nurse of Tutankhamun", *Egyptian Archaeology* 13, 1998, pp.7-8.

14　イパイの墓は、日乾煉瓦造による壁体が残存するのみであるが、サッカラにおける類例では、煉瓦壁体に石灰岩製の薄板を表装に用いることが指摘されており、ラメセス２世時代後期以降は石灰岩を二重に積んだ壁体の空隙に同じ石材のかけらを充填する建築工法へ変化すると言われている。van Dijk, J., "The Development of the Memphite Necropolis in the Post-Amarna Period", in Zivie, A.-P. (ed.), *op.cit.,* pp.42-43.

15　幕壁に関してはRamesside Tombs at Saqqaraを参照されたい。

16　ピラミディオンは珪岩製である。東面には日の出の神への賛辞が刻まれていた。同面には小さなニッチが掘られ、膝まづいた人物がナオスを抱える姿の彫像があった。ピラミディオンは基底部幅0.98m、高さ1.04mほどで、新王国時代のピラミディオンでは最大規模となる。北面と南面にパシェドゥの名が刻まれていた。Rammant-Peeters, A., *Les Pyramidions Égyptiens du Nouvel Empire,* Leuven, 1983, pp.27, 35-37, 93-94.

17　棺は2.7m x 1.5mの規格で、深さは1.4mを測る。上面には厚さ0.15m程度の石灰岩製の蓋石列がモルタルで接着されて残存していたが、南端の蓋が開けられて中は盗掘を受けていた。棺の内側は、石灰岩の切石が貼られた精巧な造りとなっていた。同様の遺構例はサッカラのティアの墓（第19王朝）でみられる。*Tia and Tia,* pl.6.

18　写真で掲げたのはイパイの墓の出土例である。これらのうち、長頸のものはシリアタイプと呼ばれ、第18王朝末に年代づけられる。*Egypt's Golden Age: The Art of Living in the New Kingdom 1558-1085 BC,* Boston, p.82, no.61.（以下*EGA* と略記）; Bourriau, J., *Umm el-Ga'ab,* Cambridge, 1981, p.123, no.244.

19　これらもアマルナ時代頃を特徴付ける搬入土器である。*EGA,* p.156, no.165; Baurriau, *op.cit*., p.124, no.246; pp.135-136, no.267. Merrillees, R. and J. Winter, "Bronze age trade between the Aegean and Egypt-Minoan and Mycenaean pottery from Egypt in the Brooklyn Museum", *Miscellanea Wilbouriana,* vol.1, 1972, p.101.

20　銘文は「トゥトアンクアメン・南のヘリオポリスの支配者、全ての国々を征服するもの *twt-ʿnḫ-imn ḥkꜣ iwnw šmꜣw wʿf ḫꜣ st nb(t)*」の意である。類似したジャー・スタンプは、ツタンカーメン王墓から報告されているが、同一のものは知られていない。Hope, C.A., "The Jar sealings", in Baines, J. (ed), *Stone Vessels, Pottery and Sealings from the Tomb of Tut'ankhamun,* Oxford, 1993, pp.87-138.

21　*EGA*, p.130.

22　この図柄をもつ指輪は、アメンヘテプ３世からラメセス２世頃までに特徴的なもので、ツタンカーメン王墓の出土例も知られる。*EGA*, p.248, nos.343, 344; Reeves, N., *The Complete Tutankhamun,* London, 1990, p.150.

23　ウジャトの目の指輪は、アマルナの王家の墓に類例がある。Markowitz, Y.J. and P. Lacovara, "Crafts and Industries at Amarna", in Freed, R.E., Y.J. Markowitz and S.H. D'Auria (eds.), *Pharaohs of the Sun,* Boston, 1999, p.135, figs. 95, 269.

24　第18王朝末から第19王朝初期に特徴的な襟飾りである。*EGA*, p.235, no.308; pp.238-239, no.316; Hayes, W.C., *The Scepter of Egypt,* vol.2, New York, 1959, p.303, Fig.188, no.321; Fig.203, no.1; Andrews, C., *Amulets of Ancient Egypt,* London, 1994, pl.105; pl.65a, n, o.

25　Capel, A.K. and G.E. Markoe, *Mistress of the House, Mistress of Heaven, Women in Ancient Egypt,* New York, 1996, p.83, no.23x.

26　遊戯面は方形の板が横３列、縦10列と考えられた。遊戯面の板には、鳥などのモチーフが線刻で描かれていた。引き出しの前面には、ロータスをあしらった把手がつけられており、金具にはブロンズが用いられていた。引き出しの側面には、線刻で花模様が描かれていた。円錐形

状のコマは高さ33cm、鼓形状のコマは高さ1.5cmを測る。Tait, W.J., *Game-Boxes and accessories from the Tomb of Tut'ankhamun,* Oxford, 1982; Needler, W.A., "Thirty-Square-Draught-Board in the Royal Ontario Museum", *The Journal of Egyptian Archaeology* 39 (1953), pp.60–75.

27 「マアトの供物台の書記、アイと称されるアメンエムオペト」と記されていた。木製枕の類似出土例は以下。*EGA*, pp.74–75.

28 Capel, A.K. and G.E. Markoe, *Mistress of the House, Mistress of Heaven, Women in Ancient Egypt,* New York, 1996, p.83, no.23x.

29 Kaper, O.E., "The Door Sealings and Object Sealings", in Baines (ed), *op.cit.*, pp.139–177.

30 これらの多くが青色あるいは乳白色の釉薬が施されたファイアンス製であった。

31 「王の家令、書記メス」と記されていた。

32 石棺の内部からはさらに、バクエンアメンの名をもつ凍石製の心臓スカラベや、ウジャトが描かれたファイアンス製のブーメランがみつかり、石棺の周囲からはカノプス壺などの大型石製容器片が多数取り上げられた。

33 Taylor, J.H., "Patterns of colouring on ancient Egyptian coffins from the New Kingdom to the Twenty-sixth Dynasty: an overview", in Davies, W.V. (ed.), *Colour and Painting in Ancient Egypt,* London, 2001, pp.164–181.

34 Maarten, J., et al., "Preliminary Report on the Saqqara Excavations, Season 1996", *Oudheidkundige Medelingen van het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 77, 1997, pl.4.3.

35 墓主がオシリス、イシス、ネフティスに供物を捧げる場面の類例には以下。Martin,G.T., *The Tomb-chapels of Paser and Ra'ia at Saqqara,* London, 1985, pl.12, Cats.7–9.またサッカラ地区では、本例と同様の図柄をもつステラが、マヤの墓に近接したところから出土している。*Hidden Tombs,* pl.111.

36 Davies, N. de G., *The Rock Tombs of the El Amarna, part VI.-Tombs of Parennefer, Tutu, and Aÿ,* London, 1908, pl.20.

37 シャフトAの内側に整然と積まれた石材の大きさは、約52L x 26D x 22H cmであって、「タラタート」と呼ばれるきわめて特殊な建材と一致しており、また現在までにみつかっているタラタートは、いずれもアクエンアテンの時代のものである。Gohary, J., *Akhenaten's Sed-festival at Karnak,* London, 1992, pp.215; Kemp, B.J. (ed.), *Amarna Reports V,* London, 1989, pp.138, 140.

38 参考文献5参照。

39 Sowada, K., T. Callaghan and P. Bentley, *The Teti Cemetery at Saqqara, IV: Minor Burials and Other Material,* Warminster, 1999.

40 参考文献12参照。